

氏 名	あら い かず ひろ 新 井 一 寛
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 38 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	エジプトにおけるタリーカの組織的革新性と宗教実践 ——ジャーズリーヤ・シャーズィリーヤ教団の現代的展開——

論文調査委員 (主 査) 助教 東長 靖 教授 小杉 泰 助教 田辺明生 助教 赤堀雅幸

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代エジプトにおける民衆運動であるタリーカ（スーフィー教団）の実態を、組織論と宗教実践という観点から解明することを目指したものである。申請者は、ジャーズリーヤ・シャーズィリーヤ教団（以下、ジャーズリーヤ教団）というタリーカに着目し、首都カイロにおける長期の臨地調査に基づいて、先行研究で指摘されてきた近代的タリーカのあり方と異なる、その新たな展開を描き出すことを企図している。

序章では、先行研究を整理したうえで、本論文の課題を設定する。タリーカ研究の古典であるトリミングムの研究に始まって、今日に至るタリーカ組織論の系譜について整理し、なかでも「ネオ・スーフィズム論」と呼ばれる近代的タリーカについての論に注目する。そのあり方を、中央集権という言葉で概括したうえで、本論文の課題はこの中央集権化のさまざまなあり方について考察するものであるとする。同時に申請者は、レヴツィオンやギルセナンの先行研究を引きつつ、タリーカ組織論を論じるにあたって、宗教実践との関係を視野に入れることの重要性を説いている。

第1章は、本論文の歴史的・社会的背景を整理する。エジプトは、近代になって、国家が宗教を統制するためにさまざまな方策をとってきたが、タリーカに関しても、「スーフィー教団最高評議会」という組織を設けて一元管理を目指した。イスラーム世界全体のタリーカのあり方の中で考えてみる時、このように国家がタリーカを一元管理しようとし、それが現在に至るまである程度成功しているという事態は、きわめて特異なことであり、注目に値する。タリーカが国家権力によって制度化され、それに即応する形で、中央集権的組織化が行われてきたことを、歴史的に跡付けてみせたのが本章である。この典型的な例として、ハーミディーヤ・シャーズィリーヤ教団（以下、ハーミディーヤ教団）が紹介されるが、この教団のあり方は、後の議論の参照軸となるものである。

第2章から第3章は、本論文の主たる考察対象である、ジャーズリーヤ教団を扱う。この教団は、20世紀後半に活動を始めた、比較的若い教団である。その全体像を把握することが第2章の狙いであり、教団の歴史や現状を整理する一方、頻繁に行われる宗教実践について、具体的に描写する。その結果として、シャイフ（タリーカにおける導師。以下、導師と表記する）一人にリーダーシップを集中させ、ほかのメンバー間の平等性を徹底する本教団の特徴を浮き彫りにする。

第3章は、聖者生誕祭（マウリド）に着目し、ジャーズリーヤ教団の組織的活動を考察する。3つの生誕祭をとくに取り上げ、その宗教実践の様子を克明に描き出すとともに、それらの間に見られる相違に注目する。同教団は、宗教実践の際の高揚した感情をはばからずに表現することを特徴とするが、申請者は、場合によっては、彼らがこの感情の発露をあえて抑えていることを指摘する。それは、いわゆる近代的なタリーカでは合理性が重んじられ、この種の感情表現が非合理的なものとして非難を受けかねないことに起因している。同教団は、自分たちだけの集まりでは自由な感情表現を許しながら、他教団の導師などが同席する際には、これを見せないことによって、非難されることを避けようとする。こういった宗教実践のあり方を、申請者は戦略的な組織的活動であると位置づける。

第4章は、同じく現代エジプトにあって民衆の支持を受けながら、ジャーズリーヤ教団の組織化とはまったく違う原理

に基づいて成立していると思われるティジャーニーや教団を、比較の対象として取り上げる。この教団は、イスラーム世界全域に広がる中央集権的組織とみなされるが、今は亡き教団創始者にすべてのカリスマ性が集中し、現存する各地の導師は交換可能な存在でしかない。その組織化を支えているのは、簡潔な教義・規則と定式化された宗教実践の遵守・実践である。

第5章および結論は、第1章で触れたハーミディーヤ教団、第4章で扱ったティジャーニーや教団と比較しながら、ジャズーリーヤ教団の組織的革新性を、宗教実践との関わりに留意しつつ論じる。申請者はここで、エチオーニの提唱した組織論に基づきつつ、一口に中央集権的組織といっても、様々なタイプがあることを指摘する。身近な導師がカリスマとなり、その権威が、ヒエラルキー的構造をなす組織の下部まで行き渡っているハーミディーヤ教団のタイプが、これまでの研究では、いわゆる「近代的」タリーカの典型例とみなされてきた。他方、ティジャーニーや教団は、精神的位階を反映させたヒエラルキー構造を有してはいるが、その内実は個々の指導者が自立的な活動をおこない、指令系統が多能的に存在しているという別のタイプを形成している。

これらに対して、本論文の検証の主たる対象であるジャズーリーヤ教団は、カリスマ的権威が組織の中心にあるが、ヒエラルキー的構造の頂点と下部との間に媒介項は存在せず、直接人格的な関係が成立する。この構造は、一方では、国家の要請する上意下達の中央集権的組織であることを保証する。しかし他方、この直接的な人間関係は、導師への熱情的な個人崇敬の念を呼び起こし、宗教実践において、時には非合理的とも見える感情の発露に結びつく。このように、従来の理解では「近代的」とされてきた側面と、「前近代的」と理解されかねない側面とを、ともに有するのがジャズーリーヤ教団の特徴であり、そこに申請者は、従来の「近代的」タリーカ像を超えた、現代エジプトにおける同教団の組織的革新性を見出すのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代エジプトにおける、ジャズーリーヤ・シャーズィリーヤ教団（以下、ジャズーリーヤ教団）というタリーカに肉薄した民族誌であるとともに、タリーカ組織論への新たな貢献を目指すものである。

タリーカ論は従来、その組織の存在を前提として、経済的裏づけや政治的・社会的役割を論じることが多かった。これに対して歴史研究からは、前近代の史料記述に基づき、従来の定説であった「スーフィー教団」に疑問符を投げかけ、そもそも確固たる組織と捉えられない例が多いという議論がなされてきた。近年になって、私たちが従来前提としてきたタリーカ像が、近代エジプトにおいて、国家主導のもと制度化されたタリーカを典型的なモデルとして形成されたものであることが、明らかになってきている。

本論文が対象とするジャズーリーヤ教団は、このようなエジプトのタリーカに関する先行研究が、注目すべき事例として言及しながらも、これまで本格的に研究されることのなかった対象である。申請者は、この教団に着目することにより、タリーカ論の中核をなしてきたエジプトにおけるタリーカの一典型の実態を明らかにすると同時に、それが従来のタリーカ組織論の理解を超えていることを指摘し、より大きなタリーカ組織論構築への礎を築こうとしている。

本論文の貢献は、以下の4点に集約することができる。

第一は、詳細なエスノグラフィーとしての、資料的価値の高さである。ジャズーリーヤ教団は、エジプトにおける「近代」型タリーカのひとつの典型例としてその存在がずっと知られていながら、その詳細は知られることがなかった。申請者は、この教団の内部に入り込んで長期にわたる調査をはじめて行い、実態を克明に解明することに成功した。

第二に、同教団を従来型の「近代」的タリーカの枠組みで理解するのにとどまらず、新たな枠組みを提示したことである。いわゆる「近代的」タリーカの典型例とされるのは、ハーミディーヤ教団であるが、その特徴は、効率を重んじ、非合理的なものを排除する理知性にあった。この意味で、伝統的共同体と強く結びつき、オカルト的な修行を重んじる「前近代的」タリーカとは異なるひとつの像が「近代」的タリーカ像として形成され、私たちはその像を現代においても典型的であるに違いないと思ってきた。しかし、ジャズーリーヤ教団は、情動性と中央集権的組織性を同時に伴っており、ここに申請者は、タリーカの新しい類型を発見した。この際、宗教実践と密接に関係させながら、組織論を分析したところに、申請者の特色がある。また、近代的タリーカはすべて中央集権的と思われてきたことに対し、中央集権のあり方をさらに細かく検討した点、近年話題を集めているテーマである「ネオ・スーフィズム論」の再検討に一石を投げようとしている点も、評価に

値する。

第三は、本論文が主として対象とするジャーズーリーヤ教団だけでなく、カイロの70を超えるタリーカについて、悉皆調査ともいえる幅広い調査を行い、それを元に立論を行っていることである。第1章で取り上げられるハーミディーヤ教団、第4章で取り上げられるティジャーニーヤ教団の事例は、このような豊富な調査データの中から抽出されたものであり、申請者が研究対象の教団を、幅広い文脈の中に位置づけることを可能にしている。

第四に、現代エジプトにおけるタリーカ組織論への貢献を挙げることができる。上に述べたように、本論文は、直接の研究対象をジャーズーリーヤ教団に絞りながらも、常にエジプトにおける他の数多い教団と比較し、類型化することを目指している。本論文は、単にジャーズーリーヤ教団という一タリーカの特徴を語ることにとどまらず、現代エジプトに存在するタリーカの組織について、類型論を展開する可能性をも秘めているのである。

以上のように本論文は、着実な事例研究でありながら、これまでの通説に対して鋭い問題提起を投げかける理論的貢献もなしており、現代エジプト・タリーカ研究の進展に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。